

あの日から10年目を向かえるに当たり…

## 「3.11と命を考える」シリーズ その1

震災当時3歳だった少女は中学1年生になった。そして、少女は、震災で失った3歳年上の姉に会いたくて小説を書いた。その小説が今話題になっている。先日NHKの番組で少女がインタビューに答えていた。「姉に会いたい、この願いを小説で叶えて自分は幸せだった。しかし、両親の会話で気が付いた。「天国で彼氏でもできて幸せに暮らしているかしら」そうか、小説の中で、私はずっと姉と一緒にいることを望んだけれどそれは、わたしの幸せ。姉を天国に帰してあげよう。天国で幸せに暮らすことを祈って。」

大切ないのちが失われたとき、残された人が思う気持ちと、どんな状況下においても、相手の思いをくみ取る創造力と優しさが伝わる小説として、地域紙「石巻学」に掲載。



タイトル「真っ白な花のように」は、姉が見つかった場所に咲いたフランス菊にちなんでつけられたものだそうだ。著者 佐藤珠莉(13才)の母は3年前、6歳で幼稚園の送迎バスの中で亡くなった姉に中学の制服を仕立てた。サイズの想定は、妹の珠莉さんだった。今春姉の制服を着て、著者珠莉さんは中学に通い始めた。

## クリスマスプレゼントの準備始まる

クリスマスプレゼントの準備が始まる頃になると、必ず思い出すことがある。震災の2012年12月のクリスマスに、父を失った幼い2人の少女のこと。手袋やマフラー、ぬいぐるみなどを箱につめて、メッセージカードを添える。

必ず、幼い二人から「ありがとう」と書いてくれたはがきが届けられる。

お父さんに会いたいよと、泣き叫んで疲れはてて寝てしまうわが子の寝顔を見てから、私は声を殺して泣くんです。」と話してくれたまだ若い母親。親子に会いたくて気仙沼を尋ねた。母親は美容店が持ってたといい、住まいを案内してくれた。少しほっとした。今年はコロナ禍でお店の減収は大丈夫だったのだろうか。そんなことを思いながら、今年もプレゼントの準備にかかる。

委員会が考えているプレゼントは…**クリスマスカード書いてくれる人募集中**

京都の特産品がいいね。お菓子・漬物かな？絵本がいいかもね。文具？寒さ防止用品？などかな？

# 中学3年生修学旅行「がまだすドーム」を見学

中学3年生は修学旅行の1日目（10月28日）に「がまだすドーム」（雲仙岳災害記念館）を訪れ、火山が噴火する危険性を知り、復興の道すじと災害へ備える必要性を学びました。事前学習では、理科と総合の時間で火山の成り立ちや、火山灰質の土壌と農業、景観を活かした観光業の様態を確かめました。現場でどのようなことが起きたのか追体験することで、自然災害に対する理解が深まりました。

## 生徒の感想

※右の写真は夕暮れの雲仙岳（眉山の崩落跡も見える）



- ・映像を見ながらクイズに挑戦することで、今まで全く知らなかった火山の知識を知ることができた。
- ・火山の恐ろしさを知って、被災した人がどんな思いをしたかなど共感できる時間を持ってました。
- ・一瞬で人を焼き殺してしまう火砕流の威力に驚きました。様々な体験を通じて学ぶことが沢山ありました。
- ・雲仙岳が平成に噴火していたのは授業で見たけど、江戸時代にも大きな噴火があったことを知りました。当時の災害の状況を知ることも大事だと思いました。
- ・がまだすドームに行って、火山について改めて皮相<sup>ひそう</sup>な理解では不十分だということに気付かされました。火山活動が始まって<sup>きよそ</sup>も<sup>きよそ</sup> 挙措<sup>きよそ</sup>を失うことがないように、学んだ内容を頭に入れておこうと思います。



## トルコでM7地震発生 死傷者1000人を超える

10月30日午後2時50分頃、トルコ西部の沖合を震源地とするマグニチュード7.0の地震があった。

多数の建物の倒壊による犠牲者の他にも、沿岸部では津波も発生し、車椅子の女性が浸水で死亡する被害もあった。トルコや、隣接するギリシャで死傷者1000名を超えたと現地では報道された。

一方で「奇跡の救出劇」もあった。現地の報道によると11月3日、建物の瓦礫の下に91時間取り残されていた幼い女の子が救出された。救助隊が助け出した時、女の子は冷蔵庫や食器洗浄機が重なってできた隙間に挟まっていたという。地震の発生から、生存率が急激に下がるとされる72時間が過ぎたあとただただに、大きな話題になった。

トルコの防災には、国際協力機構（JICA）を中心に日本も関わっている。西部の都市ブルサには、兵庫県の「人と防災未来センター」をモデルにした「防災館」があり、市内の小中学生が学習に訪れている。専門家同士の交流もたびたび行われており、新型コロナウイルス禍の今年もオンライン会議が行われていた。天災は、いつ、地球規模の何処で起こるか分からない…。いざという時に備える気持ちと、被災地に思いを馳せる感性の豊さを持ち合わせてほしいものだ。

